

行列の対角化とジョルダン標準形

まつおか まなぶ
松岡 学

0. はじめに

今回は、行列の n 乗を求める問題を行列の対角化、ジョルダン標準形などを用いて理論的に解説することを試みた。そしてその応用として、数列の漸化式、微分方程式の問題を考察した。

1. 対角化の一般論

行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ に対して

$$t^2 - (a+d)t + ad - bc = 0$$

を A の固有多項式、

$$t^2 - (a+d)t + ad - bc = 0$$

を A の固有方程式という。また、 $A\vec{p} = \alpha\vec{p}$ となるような α と $\vec{0}$ でない \vec{p} が存在するとき、 α を A の固有値、 \vec{p} を A の固有値 α に属する固有ベクトルという。

さて、行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ に対して、その固有方程式 $t^2 - (a+d)t + ad - bc = 0$ が異なる 2 つの実数解 α, β をもつとする。 $A\vec{p} = \alpha\vec{p}$, $A\vec{q} = \beta\vec{q}$ となるような $\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \end{pmatrix}$, $\vec{q} = \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \end{pmatrix}$ が存在する。

具体的には $\begin{pmatrix} b \\ \alpha - a \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} \alpha - d \\ c \end{pmatrix}$ の $\vec{0}$ でない方を \vec{p} , $\begin{pmatrix} b \\ \beta - a \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} \beta - d \\ c \end{pmatrix}$ の $\vec{0}$ でない方を \vec{q} とおけばよい。

ここで、行列 P を $P = \begin{pmatrix} p_1 & q_1 \\ p_2 & q_2 \end{pmatrix}$ とおくと、 P は正則行列となり $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ が成り立つ。

$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ の両辺を n 乗すると

$$P^{-1}A^nP = \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix} \text{ となる。}$$

よって、 $A^n = P \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix} P^{-1}$ となり A^n が求まる。

問題 1

行列 $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ -1 & 4 \end{pmatrix}$ について、 A^n を求めよ。

(解答) A の固有方程式は $t^2 - 5t + 6 = 0$ となる。

$$(t-2)(t-3) = 0 \text{ より } t = 2, 3$$

よって、 A の固有値は 2, 3

$$\vec{p} = \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix}, \vec{q} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ とおくと } \vec{p} \text{ は固有値 } 2 \text{ に属する}$$

固有ベクトル、 \vec{q} は固有値 3 に属する固有ベクトル

となる。ここで $P = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix}$ とおくと

$$P^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 2 \end{pmatrix} \text{ となり } P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 3 \end{pmatrix} \text{ が成り}$$

立つ。

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 3 \end{pmatrix} \text{ の両辺を } n \text{ 乗すると}$$

$$P^{-1}A^nP = \begin{pmatrix} 2^n & 0 \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} \text{ となる。}$$

$$\text{よって } A^n = P \begin{pmatrix} 2^n & 0 \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} P^{-1}$$

$$= \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2^n & 0 \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ -1 & 2 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} 2^{n+1} - 3^n & -2^{n+1} + 2 \cdot 3^n \\ 2^n - 3^n & -2^n + 2 \cdot 3^n \end{pmatrix}$$

(解答終り)

2. ジョルダン標準形

この節では行列 A の固有方程式が重解をもつ場合を考察する。 $A = \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & a \end{pmatrix}$ の場合は、初めから対角行列になっているので、この場合は除いて考える。

$A \neq \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & a \end{pmatrix}$ なる行列 $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ に対して、その固有方程式 $t^2 - (a+d)t + ad - bc = 0$ が重解 α をもつとする。まず、 $A\vec{p} = \alpha\vec{p}$ なる $\vec{0}$ でない \vec{p} を定める。具体的には、 $\begin{pmatrix} b \\ \alpha - a \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} \alpha - d \\ c \end{pmatrix}$ の $\vec{0}$ でない方

を \vec{p} とおけばよい.

ケーリー・ハミルトン方程式より $(A - \alpha E)^2 = O$

よって、任意のベクトル \vec{q} に対して

$(A - \alpha E)^2 \vec{q} = \vec{0}$ となるので、

$A(A - \alpha E)\vec{q} = \alpha(A - \alpha E)\vec{q}$ が成り立つ.

よって $\vec{p} \parallel (A - \alpha E)\vec{q}$ となるので、 $\vec{p} = (A - \alpha E)\vec{q}$

かつ $\vec{p} \times \vec{q}$ となるように \vec{q} をとれる.

$\vec{p} = (A - \alpha E)\vec{q}$ より $A\vec{q} = \vec{p} + \alpha\vec{q}$

以上をまとめると $\begin{cases} A\vec{p} = \alpha\vec{p} \\ A\vec{q} = \vec{p} + \alpha\vec{q} \end{cases}$

$\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \end{pmatrix}$, $\vec{q} = \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \end{pmatrix}$ とし、行列 P を $P = \begin{pmatrix} p_1 & q_1 \\ p_2 & q_2 \end{pmatrix}$ と

おくと、 P は正則行列であり、

$$A \begin{pmatrix} p_1 & q_1 \\ p_2 & q_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha p_1 & p_1 + \alpha q_1 \\ \alpha p_2 & p_2 + \alpha q_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} p_1 & q_1 \\ p_2 & q_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$$

となる. よって、 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$ が成り立つ. こ

れを、行列 A のジョルダン標準形という. A のジョルダン標準形が求まれば、 $\begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}^n = \begin{pmatrix} \alpha^n & n\alpha^{n-1} \\ 0 & \alpha^n \end{pmatrix}$

より A^n が求まる. $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$ の両辺を n 乗

すると、 $P^{-1}A^nP = \begin{pmatrix} \alpha^n & n\alpha^{n-1} \\ 0 & \alpha^n \end{pmatrix}$ となるので

$$A^n = P \begin{pmatrix} \alpha^n & n\alpha^{n-1} \\ 0 & \alpha^n \end{pmatrix} P^{-1}$$

問題 2

行列 $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ -1 & 4 \end{pmatrix}$ について、 A^n を求めよ.

(解答 1) A の固有方程式は $t^2 - 6t + 9 = 0$ となる.

$(t-3)^2 = 0$ より $t=3$

よって、 A の固有値は 3

$\vec{p} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ とおくと、 \vec{p} は固有値 3 に属する固有ベクトルとなる.

$A - 3E = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$ より $\vec{q} = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \end{pmatrix}$ とおくと、 $\vec{p} \times \vec{q}$

であり、 $(A - 3E)\vec{q} = \vec{p}$ が成り立つ.

ここで $P = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ とおくと、 $P^{-1} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$ と

なり $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 0 & 3 \end{pmatrix}$ が成り立つ.

$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 0 & 3 \end{pmatrix}$ の両辺を n 乗すると

$P^{-1}A^nP = \begin{pmatrix} 3^n & n3^{n-1} \\ 0 & 3^n \end{pmatrix}$ となる.

よって $A^n = P \begin{pmatrix} 3^n & n3^{n-1} \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} P^{-1}$

$$= \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3^n & n3^{n-1} \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} 3^n - n3^{n-1} & n3^{n-1} \\ -n3^{n-1} & 3^n + n3^{n-1} \end{pmatrix}$$

(解答終り)

(解答 1) では、ジョルダン標準形による理論的な解答を与えておいた. 実際には、2 項定理を用いた解答の方が実用的なので、そちらの解答も与えておく.

(解答 2) ケーリー・ハミルトン方程式より

$$A^2 - 6A + 9E = O$$

よって $(A - 3E)^2 = O$

ここで $N = A - 3E$ とおくと $N = \begin{pmatrix} -1 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$ とな

る. $A = 3E + N$ であり

$$N^2 = N^3 = \dots = N^n = O$$

2 項定理より

$$A^n = (3E + N)^n = 3^n E + n3^{n-1} N$$

$$= \begin{pmatrix} 3^n & 0 \\ 0 & 3^n \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -n3^{n-1} & n3^{n-1} \\ -n3^{n-1} & n3^{n-1} \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} 3^n - n3^{n-1} & n3^{n-1} \\ -n3^{n-1} & 3^n + n3^{n-1} \end{pmatrix}$$

(解答終り)

3. 固有方程式が異なる 2 つの虚数解をもつ場合

固有方程式が異なる 2 つの虚数解をもつ場合も、

1 で述べたことがそのまま成り立つ. つまり、行列

$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ に対して、その固有方程式

$t^2 - (a+d)t + ad - bc = 0$ が異なる 2 つの虚数解 α , β をもつとき、固有値 α , β に属する固有ベクトル

$\vec{p} = \begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \end{pmatrix}$, $\vec{q} = \begin{pmatrix} q_1 \\ q_2 \end{pmatrix}$ を取り (具体的には

$\begin{pmatrix} b \\ \alpha - a \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} \alpha - d \\ c \end{pmatrix}$ の $\vec{0}$ でない方を \vec{p} ,

$\begin{pmatrix} b \\ \beta - a \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} \beta - d \\ c \end{pmatrix}$ の $\vec{0}$ でない方を \vec{q} とおけばよい)

行列 P を $P = \begin{pmatrix} p_1 & q_1 \\ p_2 & q_2 \end{pmatrix}$ とおくと、 P は正則行列と

なり、 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ が成り立つ.

よって、 $A^n = P \begin{pmatrix} \alpha^n & 0 \\ 0 & \beta^n \end{pmatrix} P^{-1}$ が成り立つ。

なおこの場合、固有値 $\xi \pm \eta i$ (ξ, η は実数) に対して、行列 P を $P = \begin{pmatrix} b & 0 \\ \xi - a & -\eta \end{pmatrix}$ とおくと ($b=0$ のときは、 $P = \begin{pmatrix} \xi - d & -\eta \\ c & 0 \end{pmatrix}$ とおく)、 P は正則行列となり $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \xi & -\eta \\ \eta & \xi \end{pmatrix}$ が成り立つことが計算によって確かめられる。 $\begin{pmatrix} \xi & -\eta \\ \eta & \xi \end{pmatrix}$ は、回転行列を $\sqrt{\xi^2 + \eta^2}$ 倍した行列なので、実用的にはこちらで十分である。

4. まとめ

この節では、これまでに導き出した結果をまとめておく。

定義 行列 A, B について、 $P^{-1}AP = B$ となる正則行列 P が存在するとき、 A と B は相似であるといふ $A \sim B$ と表す。

定理 1 2 次の正方行列 A について

(1) A の固有方程式が異なる 2 つの解をもつならば、 A は対角行列と相似である

$$A \sim \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

(2) A の固有方程式が重解をもつならば、 A はスカラー行列またはジョルダン標準形と相似である

$$A \sim \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix} \text{ または } A \sim \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$$

ここで、スカラー行列 $\begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$ は対角行列 $\begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$ の特別な場合であることに注意すれば、次のことが分かる。

定理 2 すべての 2 次正方行列 A は、対角行列またはジョルダン標準形と相似である。

$$A \sim \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} \text{ または } A \sim \begin{pmatrix} \alpha & 1 \\ 0 & \alpha \end{pmatrix}$$

つまり、考える範囲を複素数にまで広げることによって、すべての 2 次正方行列は、対角行列または

ジョルダン標準形と相似であることがわかった。これは、2 次方程式の解が、複素数にまで考える範囲を広げることによって、完全な形で解くことができるのと事情が似ており、非常に本質的なことである。

5. 数列の漸化式や微分方程式への応用

この節では、行列の対角化、ジョルダン標準形の理論の応用として、数列の漸化式や微分方程式の問題を考察する。

数列 $\{a_n\}, \{b_n\}$ が $\begin{cases} a_{n+1} = a a_n + b b_n \\ b_{n+1} = c a_n + d b_n \end{cases}$ で定められ

ているとする。行列 A を $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ とおくと

$$\begin{pmatrix} a_{n+1} \\ b_{n+1} \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} \text{ と表されるので、} \begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} a_{n-1} \\ b_{n-1} \end{pmatrix}$$

より $\begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} = A^{n-1} \begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \end{pmatrix}$ となり、 a_n, b_n が求まる。

問題 3 数列 $\{a_n\}, \{b_n\}$ が次の式で定められている。一般項を求めよ。

$$\begin{cases} a_{n+1} = 2a_n - 3b_n \\ b_{n+1} = a_n + 6b_n \end{cases} \begin{cases} a_1 = 2 \\ b_1 = 4 \end{cases}$$

(解答) $A = \begin{pmatrix} 2 & -3 \\ 1 & 6 \end{pmatrix}$ とおく。

$$\begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} a_{n-1} \\ b_{n-1} \end{pmatrix} \quad (n \geq 2) \text{ と表される。}$$

ここで A の固有方程式は $t^2 - 8t + 15 = 0$ より $(t-3)(t-5) = 0$ となり、 A の固有値は 3, 5 となる。

$\vec{p} = \begin{pmatrix} -3 \\ 1 \end{pmatrix}, \vec{q} = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ とおくとそれぞれ固有値 3, 5 に属する固有ベクトルとなる。

$$P = \begin{pmatrix} -3 & -1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \text{ とおくと } P^{-1} = -\frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & -3 \end{pmatrix} \text{ で}$$

あり $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 5 \end{pmatrix}$ となる。

$$P^{-1}A^n P = \begin{pmatrix} 3^n & 0 \\ 0 & 5^n \end{pmatrix} \text{ より}$$

$$\begin{aligned} A^n &= P \begin{pmatrix} 3^n & 0 \\ 0 & 5^n \end{pmatrix} P^{-1} \\ &= -\frac{1}{2} \begin{pmatrix} -3 & -1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & -3 \\ 1 & 6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & -3 \end{pmatrix} \\ &= -\frac{1}{2} \begin{pmatrix} -3^{n+1} + 5^n & -3^{n+1} + 3 \cdot 5^n \\ 3^n - 5^n & 3^n - 3 \cdot 5^n \end{pmatrix} \end{aligned}$$

ここで $\begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} = A^{n-1} \begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \end{pmatrix}$ より

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} a_n \\ b_n \end{pmatrix} &= -\frac{1}{2} \cdot \begin{pmatrix} -3^n + 5^{n-1} & -3^n + 3 \cdot 5^{n-1} \\ 3^{n-1} - 5^{n-1} & 3^{n-1} - 3 \cdot 5^{n-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 3^{n+1} - 7 \cdot 5^{n-1} \\ -3^n + 7 \cdot 5^{n-1} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

よって $a_n = 3^{n+1} - 7 \cdot 5^{n-1}$, $b_n = -3^n + 7 \cdot 5^{n-1}$

(解答終り)

次に微分方程式への応用を考察する。まず、行列の指数関数 $\exp A$ について、簡単にまとめておく。行列 A に対して、 A の指数関数 $\exp A$ を行列 A のベキ級数として、次のように定義する。

$$\begin{aligned} \exp A &= \sum_{p=0}^{\infty} \frac{1}{p!} A^p \\ &= E + A + \frac{1}{2!} A^2 + \frac{1}{3!} A^3 + \dots \end{aligned}$$

行列の指数関数は次の性質をもつ。

性質 1

(1) P が正則行列ならば

$$\exp(P^{-1}AP) = P^{-1}(\exp A)P$$

(2) A が定数を成分とする正方行列で t が変数ならば

$$\frac{d}{dt} \exp(tA) = A \exp(tA)$$

さて、次のような微分方程式を考える

$$\begin{cases} x'(t) = ax(t) + by(t) \\ y'(t) = cx(t) + dy(t) \end{cases} \quad \dots \textcircled{1}$$

ここで $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$, $\vec{x}(t) = \begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \end{pmatrix}$ とおくと

$$\begin{pmatrix} x'(t) \\ y'(t) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \end{pmatrix} \text{ より, } \textcircled{1} \text{ は}$$

$$\frac{d}{dt} \vec{x}(t) = A \vec{x}(t) \text{ と表される.}$$

よって性質(2)より $\vec{x}(t) = \exp(tA) \cdot \vec{x}(0)$ となる。

問題 4 次の微分方程式を解け。

$$\begin{cases} x'(t) = -x(t) + 2y(t) \\ y'(t) = x(t) \end{cases} \quad \begin{cases} x(0) = c_1 \\ y(0) = c_2 \end{cases}$$

(解答) $A = \begin{pmatrix} -1 & 2 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。

$$\begin{pmatrix} x'(t) \\ y'(t) \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \end{pmatrix} \text{ と表される.}$$

ここで、 A の固有方程式は $t^2 + t - 2 = 0$ より

$(t+2)(t-1) = 0$ となり、 A の固有値は $1, -2$ となる。

$\vec{p} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$, $\vec{q} = \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \end{pmatrix}$ とおくと、それぞれ固有値 $1, -2$ に属する固有ベクトルとなる。

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \text{ とおくと } P^{-1} = -\frac{1}{3} \begin{pmatrix} -1 & -2 \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \text{ であ}$$

$$\text{り } P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix} \text{ となる.}$$

したがって $\exp(P^{-1}tAP) = P^{-1} \exp(tA) P$ より

$$\exp(tA) = P \exp(t \cdot P^{-1}AP) P^{-1}$$

$$= P \exp \begin{pmatrix} t & 0 \\ 0 & -2t \end{pmatrix} P^{-1}$$

$$= P \begin{pmatrix} e^t & 0 \\ 0 & e^{-2t} \end{pmatrix} P^{-1}$$

$$= -\frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^t & 0 \\ 0 & e^{-2t} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -1 & -2 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$= \frac{1}{3} \begin{pmatrix} e^t + 2e^{-2t} & 2e^t - 2e^{-2t} \\ e^t - e^{-2t} & 2e^t + e^{-2t} \end{pmatrix}$$

よって

$$\begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \end{pmatrix} = \exp(tA) \cdot \begin{pmatrix} x(0) \\ y(0) \end{pmatrix}$$

$$= \exp(tA) \cdot \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \end{pmatrix}$$

$$= \frac{1}{3} \begin{pmatrix} e^t + 2e^{-2t} & 2e^t - 2e^{-2t} \\ e^t - e^{-2t} & 2e^t + e^{-2t} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \end{pmatrix}$$

$$= \frac{1}{3} \left((c_1 + 2c_2)e^t + (2c_1 - 2c_2)e^{-2t} \right) \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \frac{1}{3} \left((c_1 + 2c_2)e^t + (-c_1 + c_2)e^{-2t} \right) \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \end{pmatrix}$$

したがって

$$\begin{cases} x(t) = \frac{c_1 + 2c_2}{3} e^t + \frac{2c_1 - 2c_2}{3} e^{-2t} \\ y(t) = \frac{c_1 + 2c_2}{3} e^t + \frac{-c_1 + c_2}{3} e^{-2t} \end{cases}$$

(解答終り)

< 参 考 文 献 >

「線型代数」中島惇, 石川洋文, 共立出版

(三重県立長島高等学校)